

フェミニニズムと実存

—— ボーヴォワール『第二の性』を読み直すために ——

小手川 正二郎

はじめに

ボーヴォワールは『第二の性』（一九四九年）の序文で次のように述べている。

私がこの「女性とは何かという」問いを提起していることが大きな意味をもつ。男性であれば、人類のなかで男たちが占める特殊な状況について本を書くなどという考えを抱くこともないはずだ。私が自分を定義しようとするとき、まず「私は女性である」(Je suis une femme)と表明することを強いられる。この真実が土台となって後のすべての主張が打ち立てられていく。男性は決して自分がある特定の性に属する個人 (un individu d'un certain sexe) であることとみなすことから始めたりはしない。男性であるということは、自明なことだからだ。(DS116/13頁)⁽¹⁾

男性たちは、自らの性に無頓着なまま、つまり「男性である（とみなされる）自分が問いを提起し、語ってい

る」という事実を一切考慮することなく、あたかも中立的な立場から語っているかのようにして哲学することが許されている。これに対して、女性たちは「そんなことを考えるのは、あなたが女性だからだ」(DS11615)という形で自分の問いや言説を「女性」という性に結びつけられて一方的に理解されやすい——というよりもむしろ、「女性によく見られる意見」として聞き流されやすい——がゆえに、自分が女性である(とみなされる)という事実に向き合うことから哲学を始めざるをえない。今から七〇年以上も前にボーヴォワールが提起したこうした問題を、「哲学的な問い」として真摯に受け止めた男性哲学者たちは、彼女と同時代にも現代にも、どれほどいるだろうか。

もちろん、現代の日本はボーヴォワールが生きた時代や状況とは様々な点で異なる。しかし現代の日本でも、哲学に関連する専任ポストのほとんどを男性が占めており、大学などで読まれ研究の対象とされてきた哲学者も、圧倒的に男性(それも白人の健常者のシスジェンダー男性)が多いという点が変わっていない。しかもフェミニズムに「理解」があるように見受けられる男性でも、こうした点が哲学の本質に係わると考えている人は意外なほど少ない。果たして、哲学に携わる私たちは、哲学について教え学ばれたり研究されたりする場で、誰が誰について誰に向けて語っているのかという問いに向き合ってきたのか。この問いに向き合うことがないなら、ボーヴォワールが指摘している通りのことが、つまり「男性が男性について男性に向けて語ること」が「自明」なこととみなされ「透明化」されるという事態が少なからずなお起こっているのではなからうか。

まさにこの点について、シンポジウム「フェミニズムと実存」の登壇者の一人横田祐美子は、リュース・イリガライのフェミニスト哲学について論じた論考のなかで、次のように述べている。

〔…〕 私たちが客観的かつ中立的なエクリチュールだと思い込んでいたものの中かには、男性（さらに言えば西洋人かつ白人男性の健常者）を基準としたものが数多く紛れ込んでいる〔…〕。ここでは性別を問わないはずの「人間」(man, homme) という語が、英語でもフランス語でも同時に「男性」(man, homme) を意味している。そのため、中性性には高い確率で男性性が取り憑いており、中性的なエクリチュールと見なされてきたものがまったくもって中性でも無性でもないことが明らかになる。エクリチュールとは、性の問題から完全に解き放たれた次元ではなく、そこにおいて「性的差異」がひとつの争点になりうる次元なのだ。(横田 2020: 87-88)

イリガライがこうした「性的差異」を、いわゆる「男女」間の差異やあらかじめ「明確に区別された複数のものの差異」に縮減することなく、むしろ男性的な言説形態から逃れ去り、それを攪乱するものとして捉えていたことを横田は強調している(横田 2020: 95-96)。

本稿では、このような性的差異を個々人が生きる「実存」という観点から考えていくにあたって、何度でも立ち返るべき出発点としてポヴォワールの『第二の性』に焦点をあてる。ややもすると『第二の性』はフェミニズム運動に多大な影響を与えながらもフェミニスト理論としては「不徹底」で「不充分」な著作とみなされたり、サルトル的な実存哲学を性という主題に「応用」した、哲学理論としては二番煎じの著作とみなされたりしてきた⁽²⁾。今もなお少なからず残るこうした先入見に抗して、本稿は『第二の性』を厳密に哲学的な著作として読み直そうとする近年の諸研究(Moi 1999; Bauer 2001; Garcia 2018)を参照しながら⁽³⁾、『第二の性』にセックスとジェンダーの区別を読みこもうとする従来の読解の問題点を明らかにする(第一節)。次に、個々人の身体に「与えら

れているもの」がボーヴォワール独自の「実存主義」的観点から考察されていることを明確にし（第二節）、『第二の性』ではあらゆる還元主義を拒絶するために現象学的観点が要請されていることを示す（第三節）。さらにボーヴォワールに投げかけられてきた代表的な二つの批判を取り上げ、それらが『第二の性』のいかなる側面を看過しているかを明らかにする（第四節）。これら一連の議論を通して、ボーヴォワールがいかなる水準で性的差異について哲学的に思考しようとしたのか、そして『第二の性』が男性的な観点から世界や他人を見ることを自明視してきた男性たちがいかなる問いや思考を喚起しているのかを考察する。

1 『第二の性』はどのように読まれてきたか——セックスとジェンダーの区別？

『第二の性』ほど世界中の読者に読まれてきた哲学書はおそらく存在しない。にもかかわらず、『第二の性』ほどフェミニスト哲学の著作として過小評価されてきた著作もないように思われる。事実、『第二の性』はしばしば「不徹底」かつ「不充足」な著作とみなされてきた。

「不徹底」とされるのは、ボーヴォワールが（a）生物学的・解剖学的レベルでの性（セックス）と社会的・文化的レベルでの性（ジェンダー）の区別を導入し、（b）ジェンダーが社会的・文化的に構築されたものであるがゆえに時代や社会状況に応じて変容していく点を看破したにもかかわらず、（c）セックスは生得的なものであり、不変なものとして捉えているとみなされたからだ。言うまでもなく、こうした読解路線においては、ボーヴォワールは性に関する社会構築主義の先駆けとして位置づけられる。そして、生物学的・解剖学的特徴も特定の社会・文化のなかで支配的な男女二元論的かつ異性愛主義的枠組みのもとでのみ「発見」され、区別されるがゆえ

に、セックスもまた社会的・文化的に構築されたものである点を見過ごしている——被構築性や変容可能性をジェンダーのみに制限してしまっている——点で「不徹底」とされるのだ。⁽⁴⁾

筆者もまた『第二の性』の議論を紹介する際に、無自覚的にこうした枠組みを用いてしまったことが少なからずあるが、多くの論者によって指摘されてきたように、この枠組みが『第二の性』の理解を根本的に歪めてしまっている。

そもそも『第二の性』では(a)セックスとジェンダーという区別が用いられていない——にもかかわらずそれを読みこむことは『第二の性』以降に用いられるようになった区別をアナクロニクな仕方です。『第二の性』に投影することなのだ。確かに、『第二の性』では生物学的性別としての「男/女」(male/female)と、社会のなかで「男性/女性」(homme/femme)と呼ばれているものがしばしば対比的に論じられているため、そこにセックスとジェンダーの区別を読み取ることは不可能ではない。しかし、ポヴォワールが主題的に論じていない区別を読み込むことで、(b)ジェンダーが社会構築的かつ変容可能であり、(c)セックスは生得的かつ不変なものであるという主張をポヴォワールに帰すことは様々な点で問題を抱えている。

まず、人がセックスとジェンダーという区別を『第二の性』に持ちこむとき、それを暗黙のうちに二項対立的・相互排他的とみなしており、大抵の場合、その区別に生物学的/社会的、自然的/文化的、本質主義的/構築主義的、前言説的/言説的、不変的/変容可能といった区別を重ね合わせてしまう(Moi:1999:33-34)。そうすること、こうした二項対立的な図式に縮減しえない複雑さがあるがままに記述しようとするポヴォワールの現象学的記述の豊かさを台無しにしてしまう(この点については本論後半でも立ち戻る)。

2 身体に与えられているものの引き受け方——『第二の性』の実存主義

実際、ボーヴォワールは生物学的な次元と社会的な次元を対立するものとしては捉えていない。一方で彼女は、生物学的な「女」(femelle)と社会的な「女性」(femme)との間の必然的なつながりを否定する⁽⁵⁾、つまり生物学的な特徴に基づいて出生時に生物学的な「女」に割り振られた人が社会的に「女性」と呼ばれる者として生きざるをえないということを否定する。

他方、ボーヴォワールは身体の幾つかの生物学的な特徴が社会において「女性」が理解される仕方によって一定の役割を果たしていることを否定していない。「人類は自然に反するもの (antiphysis) であると言われてきた。この表現は完全に正確とは言えない。なぜなら、人間はすでに与えられているもの (le donne) を否定しえないからだ」(DS I 7693)。こうした言明は一見すると、生物学的な特徴を生得的で不変な「セックス」として想定しているかのように聞こえる。しかし、こう述べた直後にボーヴォワールは次のように付け加えている。

ただし人間は、与えられているものを引き受ける (assumer) 仕方によって、それについての真実 (vérité) を構成する。自然が人間に対して現実性 (réalité) をもつのは、ただ自然が人間の行動によって捉え直される (reprise) 場合のみである。人間自身の自然も例外ではない。(DS I 7693)

ここで——そして『第二の性』の至るところで——ボーヴォワールは、個々人の身体に与えられているものが、

純粹な所与（自然）ではなく、その引き受け方に応じて、それがそもそもいかなるものであるのか（「真実」、意味のある事実（「現実」）として現われるか否かが左右されることを強調している。重要なのは、この引き受け方がたんに個人の意向や態度には汲み尽くされえず、個人が生きる社会のあり方と切り離せないことだ。例えば、筋力の少なさが「弱さ」として認識されたり、男性と女性の相違を説明するために重要な事実として持ち出されたりするとしたら、それは肉体的な強さや弱さが人々の支配関係をかたちづくったり、男女間の力関係に暗い影を落としていたりする——例えば性暴力を防止するような法的な枠組みが不足している——ような社会においてである。⁶⁾「弱さ」が弱さとして現れて来るのは、人間が定める目的、使用可能な道具、課せられている法といった光のもとでのみである」(DS I 75/92-93)。要するに、個々人に様々な生物学的な特徴が与えられていることは否定しえないが、そもそもどのような性質が男性と女性を分ける「特徴」とみなされ、個々の人間関係のなかでリアリティーをもって現れるかは、その性質が社会の様々な要素——人々がいかなる目的を指し、いかなる手段や道具を用いてそれを達成しようか、目的達成のためにいかなるルールを課せられているか——との関連のなかでいかに位置づけられているかを考慮に入れることなく考えることはできない、ということだ。

マノン・ガルシアによれば、こうした点に『第二の性』独自の「実存主義——「実存は本質に先立つ」——理解が色濃く反映されている。

女性がいかなるものであるのかは、女性に先立って存在する本質に由来するのではなく、女性が生きて世界をなかで生きる仕方に由来する。この「女性が生きる」社会的な次元の結果として、幾つかの生物学的な差異が意味を担う一方で、他の差異は女性性の定義にいかなる影響も及ぼさないということになる。性的差異におい

ては、人間たちの相互作用という社会的次元がはるかに重要であり、そうした社会的次元だけが数々の生物学的な差異に意味を与えるのだ。(Garcia 2018—2021: 69-70)

このような実存主義的な見方において問題となっているのは、セックスが先か、ジェンダーが先か——本質主義か、構築主義か——といった二者択一ではない。トリル・モイが指摘するように、この二者択一はセックスとジェンダーという二項対立的な概念をもちこんだ人々が見出し、回答を探そうとする、あるいは「セックスはつねにすでにジェンダーである」(Butler 1990: 10-11(28-29))と云うことで「乗り越え」ようとするものだ。「私の論点は、これ〔セックスもまたジェンダーと同様、文化的に構築されているという主張〕が誤りであるということではなく、これがそもそも「セックス/ジェンダー」という区別のポスト構造主義的な読解によって生み出された問題に対する答えではないということだ」(Moi 1999: 36)。

3 還元主義の拒絶としての現象学的立場

こうした二者択一に囚われることがないなら、性に関する生物学的知見を取り上げることがますます本質主義に与することにはならないことも理解可能となる。実際、『第二の性』第一巻第一章「生物学の様々なデータ」(Les données de la biologie)では、当時知りうる限りでの科学的な知見が非常に広範囲にわたって涉猟され検討されている。そこでは、生物学のデータが無批判的に受け入れられているわけではないし、逆に生物学が「女性の神話」を形づくる元凶として一方的に非難されているわけでもない。ポーヴォワールは、生物学のデータの見方

に——おそらくはデータのとり方そのものにも——性に関する社会的な偏見がいかに入り込んでしまいやすいかを示すとともに、逆に生物学の知見によって人々の偏見の根拠のなさが暴露されるという点も明らかにしている。⁽⁸⁾ ボーヴォワールのこのような立場は、社会構築主義の先駆け（ないし不徹底さ）としてではなく、あらゆる還元主義の拒絶として理解されねばならない（Garcia 2018=2021: 68-70）。構築主義の宣言として理解されがちな『第二の性』第二巻本論冒頭の一文「人は女性に生まれるのではない。女性になるのだ」の直後の文章も、このことを示唆している。

人は女性 (*femme*) に生まれるのではない、女性になるのだ。生物学的であれ、心理的であれ、経済的であれ、どんな宿命も人間の女 (*fenelle*) が社会の只中で (*au sein de la société*) とるあり様を定めることとはない。文明全体 (*l'ensemble de la civilisation*) が、[...] 女性的 (*féminin*) と形容されるものを作りあげるのだ。(DS II 13/上 15)。

フェミニズムと実存

ここでは第一巻で検討された生物学（第一章）、精神分析（第二章）、マルクス主義（第三章）の理論枠組みのいずれにも、女性たちが社会のなかで生きる状況が還元されえないことが再確認され、⁽¹⁰⁾そこで取り上げられた諸要素（生物学的な特徴、心理的な傾向、経済的な条件）が具体的に生きられる実存を中心とする全体論的な展望が求められている。第二巻「生きられた経験」(*L'expérience vécue*)で、「女性たちの視点から、彼女たちに提示されているがままの世界を記述する」(DS I 34/2) 現象学的な観点から、「一人一人の女性的な実存すべて (*toute existence féminine singulière*) が拠って立つ共通の土台 (*fond commun*) を記述する」(DS II 8/上 12) ことがもくろ

まれる所以である。

4 『第二の性』は「不充分」なのか——ポーヴォワールへの諸批判が見落としていること

ポーヴォワールのこうした目論見がどれほど果たされているかに関しては、多種多様な女性たちの経験が「充分に」記述されていないとする批判や、特定の女性の経験が重視ないし軽視されたりしているといった批判がしばしば投げかけられてきた⁽¹¹⁾。

一方で、白人で中産階級出身のポーヴォワールが自身やその周囲に生きる女性たちの経験を「女性一般」の経験として性急かつ過度に一般化しているという批判がある。つまり、ポーヴォワールはいわゆる「有色人種」や労働者階級の女性たちが白人や中産階級の女性たちとは著しく異なる経験をしているという事実を考慮に入れずに、後者の女性たちを「標準化」する形で女性の経験を記述してしまっており、性差別がつねに人種差別や階級差別と癒着した形でなされるという「交差性」(intersectionality)を無視しているというわけだ。こうした批判を行った代表格とみなされやすいエリザベス・スペルマンは、実のところ、ここまで粗雑で軽率な批判をしているわけではない。実際、ポーヴォワールは『第二の性』の様々な箇所で、人種や階級が異なる女性たちの差異について触れ、人種や階級によって女性たちの利害が分かれたれ(DSI 194248)、女性の連帯が阻害されていると指摘している⁽¹²⁾——このことをスペルマンは見逃していない(Spelman 1988: 62-63)。そのうえで彼女は、ポーヴォワールが(a)原則として同じ人種や階級のなかでの性差別を問題としつつ、(b)人種差別や階級差別が男女間の不平等を解消すると考えたがゆえに、(c)結局のところ彼女が問題としている性差別は、人種差別や階級差別

を被らない白人の中産階級のなかでの性差別に限定されてしまっていると指摘する (Spelman 1988: 66)。

他方、ボーヴォワールには女性が男性化することを目指しているという嫌疑がかけられてきた。これは、女性が置かれている状況を記述する際に、ボーヴォワールが自由な主体として自らの存在可能性を展開する「超越」を、自らの事實的なあり方や他人に強いられたあり方にとどまり続ける「内在」よりも本來的なあり方だとする「実存主義の道徳」(DS 13740) に依拠していることに起因するとされる。こうした枠組みのもとでは、彼女のよう男性たちと同程度に主体的に思考や創作を営む女性たちが、家事や育児といった再生産活動に閉じ込められている女性たちよりも、より自由で「超越」的なあり方をしているとみなされるからだ。

これら二つの批判に真正面から反論するには、『第二の性』全体にわたる詳細な検討が必要となるため、⁽¹³⁾ここでは紙幅の都合上、これらの批判が見落としている幾つかの重要な論点を指摘するにとどめたい。

第一に、これら二つの批判は、自らを(自由な)女性の「代表」として語るボーヴォワールにある種の「傲慢さ」——中産階級の白人女性や主体的に生きる女性を「真正な女性」とみなす傲慢さ——見て取っているということだ (Bauser 2001: 49)。しかし、ボーヴォワールの態度をこのような「傲慢さ」と断じていいのだろうか。本稿冒頭部で引用した一節で「私は女性である」と宣言するとき、ボーヴォワールは「女性とは何か」という問いに対する答えがわかっていないにもかかわらず、「私は女性である」と言う資格を(誰かに付与されたわけでもないのに)自分ももっていると「言い張っている」。ボーヴォワールが傲慢さ (arrogance) と混同される危険を冒しながら、あえてこのような言い張り (arrogation) から始めているのは、⁽¹⁴⁾哲学の主体と言説の中立性が見かけ上のものにすぎないことを暴くためであった。ボーヴォワールが「私は女性である(とみなされる)」という事実から出発せざるをえないのは対照的に、ほとんどすべての男性哲学者たちは、自らの経験や推論が性差に関係なく

妥当する「普遍的」なものであるかのようにして「人間とは何か」といった問いを論じてきた。⁽¹⁵⁾ ポーヴォワールによれば、人間が性的な身体をもつ存在であるとしたら、「人間とは何か」というジェンダー中立的に見える問いは、「女性とは、男性とは何か」といった問いに取り組むことなく答えることができないものだ。そして「女性とは、男性とは何か」を考えるためには、「私は女性／男性である（とみなされる）」という事実や女性／男性とみなされたり、自らをみなしたりする経験に立ち戻らざるをえないのだとしたら、誰もが自らの性——「男女」に汲み尽くされないものであれ——に関して自らがしかの発言権をもつ者として「言い張り」ことから出発せざるをえない。こうした点に鑑みると、ポーヴォワールの「私は女である」という言い張りは、男性哲学者たちの見かけ上の中立性に隠された傲慢さに比して、ある種の「謙虚さ」(humility)に由来するものであると言えるのだ (Bauer 2001: 47, 49)。

第二に、ポーヴォワールの記述には確かに、男性中心的社会で主体的に生きる男性たちを超越的⁽¹⁶⁾とみなし、受動的に生きることを強いられた女性たちを内在的⁽¹⁷⁾とみなす図式的な記述も散見されるが、反対にこうした図式を揺るがす記述もまた見られる。

エロスのな経験は、人間存在に、自らの状態の両義性を最も痛切に示す経験の一つだ。人間たちはエロスのな経験において自己を肉体かつ精神として、他者かつ主体として体験する。この葛藤が最も劇的な性格を帯びるのはまさに女性に対してである、というのも彼女はまず自己を客体として把握し、快樂のなかに確実な自立性を直ちに見出すことはないからだ。(…) 男性は、自らの攻撃的な役割とオーガズムに満足した孤独によって示唆される偽りの特権に自ら進んで騙されてしまい、肉体としての自己を充分に認めることをため

らう。女性は、自己自身に関して「男性よりも」より本来的な経験をもつ。(DS II 188, 上 269)。

ここでは、エロスのな経験が自己の主体性かつ客体性、精神かつ肉体という両義性を示すものとして捉えられ
たうえで、セックスにおいて自己の快感や相手の支配ばかりを追い求めるような男性がこの両義性を取り逃がし
てしまうのに対して、社会のなかで客体(例えば見られる対象)に位置づけられやすい女性の方に、主体的に快
楽を感じつつ、相手に身を任せて自己の肉体の様々な可能性に気づく機会が開かれやすいことが指摘されている。
これは男性が能動的で女性は受動的であるとする支配的なセックス観を問い直すような記述である。このように
『第二の性』の記述を丁寧に見ていくと、そこには単純な二項対立や社会のなかでの覇権的言説に汲み尽くされ
ないような洞察、藤高和輝が「普遍性」(とみなされているもの)に「トラブル」をもたらすものとして捉え直し
た「身体的生」としての実存へのまなざしが見て取れる。

ボーヴォワールにとって「実存」とはその本性上、普遍化に抵抗するものであり、というのは、それは「身
体的生」として、つまり各々の状況に拘束されたものとして存在するからである。そのとき、私たちは実存
を、「人間」という普遍性から零れ落ち、その普遍性に抗しうるものとして、つまりその社会において「普
遍的」と考えられているもの(「トラブル」)をもたらすものとして考えることができるのではないだろうか。

(藤高 2022: 95)

結 び

本稿では、『第二の性』の従来の読解に孕まれる問題点を示したうえで、ボーヴォワール独自の実存主義や、あらゆる還元主義を拒む現象学的な立場という観点にもう一度立ち戻って、『第二の性』に向けられてきた諸批判が見落としている点について考察してきた。最後に、先に見たような観点からの再読解の可能性に加えて、『第二の性』を「男性性の現象学」という観点から読み直す可能性にも触れておきたい。『第二の性』には、女性に対する男性たちの態度や言動を、女性たちの視点から記述することで、そこに見え隠れする打算やごまかしを白日のもとに晒すものが少なくない。⁽¹⁶⁾そこでは、男性中心な社会のなかで自明視され自然な反応として正当化されがちな男性のあり様を批判的な視点から記述し直すことで——本稿冒頭の引用で言及された——「男性であること」の自明性を、男性もまた「ある特定の性に属する個人」であるという単純な事実から問い直しているのだ。ある意味では『第二の性』全体が、このような観点から、哲学的議論だけでなく日常的な会話のレベルにおいてもしばしば「中立的」で「客観的」とみなされてきたような現実の見方・記述・評価の歪みや一面性を露わにし、それらの全面的な再編——たんに「女性」の観点からの補完ではなく、多様な性のあり様に即した再構築——をするという企図に貫かれたものとして読み直すことができよう。⁽¹⁷⁾

本稿で扱ったのは『第二の性』の哲学的側面に限られるが、当然ながら同書は狭義の哲学書にはおさまらない豊かな要素を含んでいる。それゆえ雑誌『シモーヌ』(vol. 1, 2021)などでボーヴォワールの多様な側面に光が当て直されていることは喜ばしいことである。いずれにせよ、何より長らく絶版となり入手困難となっていた『第

『第二の性』の邦訳が再刊される今こそ、先入見を排して『第二の性』を新たに一から読み直し、フェミニズムと実存哲学の両面からその豊かな遺産を継承する絶好の機会であろう。本稿がそうした再読の一助——ないし踏み台——になれば幸いである。⁽¹⁸⁾

参考文献

- Bauer, Nancy; Simone de Beauvoir: *Philosophy, & Feminism*, Columbia University Press, 2001.
- Beauvoir, Simone de. *Le deuxième sexe*, tome I-II, Gallimard, 1949, coll. « folio essais », 2014. (シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性』I巻「事実と神話」、II巻「体験」(上下)、『第二の性』を原文で読み直す会訳、河出書房新社、二〇二三年)
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, 1990. (ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、一九九九年)
- Froidevaux-Meterie, Camille. *Un corps à soi*, Seuil, 2021.
- Garcia, Manon. *On ne naît pas soumise, on le devient*, Climax, 2018, Flammarion, 2021.
- Haslanger, Sally. *Resisting Reality: Social Construction and Social Critique*, Oxford University Press, 2012.
- Le Deuff, Michèle. *L'Étude et le Rouet. Des femmes, de la philosophie, etc.*, Seuil, 1989.
- Moi, Toril. *What is a Woman? And Other Essays*, Oxford University Press, 1999.
- Spelman, Elizabeth V. *Inessential Woman: Problems of Exclusion in Feminist Thought*, Beacon Press, 1988.
- 池田喬「品川哲彦氏からのコメントへの応答——倫理学とは、規範を示すとは、現状の改革とは」、『倫理学論究』、vol. 4, no. 2、二〇一七年所収。
- 井上たか子「サルトルとボーヴォワール——『第二の性』の場合」、澤田直編『サルトル読本』、法政大学出版局、二〇一五年所収。
- カヴェル、スタンリー『哲学の〈声〉——デリダのオーステイン批判論駁』、中川雄一訳、春秋社、二〇〇八年。
- 小手川正二郎「『男性的』自己欺瞞とフェミニズム的「男らしさ」——男性性の現象学」、『立命館大学人文科学研究所紀要』第二二〇号、二〇一九年所収。
- 小手川正二郎「『フェミニズムの哲学』が可能だとしたら、それはどのようにしてか?」、『哲学の探求』第四八号、二〇二二年

所収。

シモーヌ編集部編『シモーヌ』vol.1、現代書館、二〇一九年所収。

中澤瞳「フェミニズムとメルロ＝ポンティ——規範を生きる身体の経験」、松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編『メルロ＝ポンティ 読本』、法政大学出版局、二〇一八年所収。

藤高和輝『ジュディス・バトラ——生と哲学を賭けた闘い』、以文社、二〇一八年。

藤高和輝『トラプル』としてのフェミニズム——「とり乱させない抑圧」に抗して、青土社、二〇二二年。

フロワドヴォー＝メトリ、カミーユ「女性の身体の回帰——カミーユ・フロワドヴォー＝メトリとの対話」、横田祐美子訳、『表象』第一六号、二〇二二年所収。

横田祐美子「女性的に書く」とはいかなる身振りか——イリガライの差異の哲学にもとづいて、『立命館言語文化研究』第三二卷、二〇二〇年所収。

注

(1) 本論中における『第二の性』の引用に際しては、略号(DS)の後に巻数を記し、邦訳を参照しつつ拙訳を提示しているため、原著頁数の後に邦訳頁数を表記した。

(2) 出版直後からこのようなフィルターを通して『第二の性』が読まれた背景には、ボーヴォワールを一人の独立した哲学者ではなく、あくまでサルトルの弟子ないし亜流とみなす見方——古来より哲学において女性が認められたのは、とりわけ男性哲学者の信奉者や恋人という役割を担うときであったという哲学の伝統に根ざした男性中心主義——が透けて見える(Le Deuff 1989: 69)。こうした見方に対しては、ボーヴォワールがサルトル(をはじめとした男性哲学者たち)の諸概念をたんに借用しているわけではなく、事柄に即して改鑄を行い彼女「独自のものとしている」(appropriate)ことが指摘されている(Bauer 2001, chap. 4)。

(3) ミシェル・ドゥフは『第二の性』を哲学的な著作として読む先駆的な試みを地道に行ってきたが(Le Deuff 1989)「彼女の優れた成果は日本ではほとんど紹介されておらず、欧米でも「極めて過小評価されて」(Bauer 2001: 243)きた。その点でも、ドゥフの二連の論考への「応答」として当初構想されたとされる『シモーヌ・ド・ボーヴォワール——哲学とフェミニズム』において、ナンシー・パウアーがボーヴォワールの哲学を現代のフェミニスト哲学として甦らせた点は画期的である(彼

- 女によるボーヴォワール読解の背景については、小手川(2022)で紹介した。より最近では、マノン・ガルシアが分析フェミニズムの成果も取り込みつつ、ボーヴォワールを新たに読み直す試みを展開し(Garcia 2018)、「カミーユ・フロワドヴォーロメトリがフェミニスト現象学の観点から『第二の性』を再評価している」(Froidevaux-Mettie 2021)。後者については、彼女の対談が横田祐美子によって翻訳・紹介されている(フロワドヴォーロメトリ 2022)。
- (4) 『第二の性』のこのような読解路線は、よく知られているようにジュディス・バトララーの『ジェンダー・トラブル』(一九九〇年)によって明確に打ち出されたものだ。ただし、藤高和輝が詳らかにしているように、八〇年代のバトララーの諸論考では、身体と切り離せない自我を思考する「非デカルト的現象学」としてボーヴォワールの議論が肯定的に解釈されており、バトララーによるジェンダーの「実演性」(performativity)の議論を「ボーヴォワールの再記述」として解釈し直す余地もある(藤高 2018 第三章および第四章を参照)。
- (5) 「人間という種には女たち (femelles) がいること、女たちは今も昔も人類のほとんど半数を占めていることは誰もが一致して認めている。にもかかわらず私たちは、「女らしさ (feminité) が危機に瀕している」と言われたり、「女性 (femme) でありなさい、女性のままではないなさい、女性になりなさい」と説き勧められたりする。ということとは、女である人間すべてが必ずしも女性であるわけではないということになる (Tout être humain femelle n'est donc pas nécessairement une femme)。「女性であるために」女は、女らしさという謎めいており、脅威にさらされている現実に参加しなければならぬのだ」(DS113-1412)。
- (6) 「[...]」世界を把握するために体力を最大限に使用する場合、各人が使用可能な最小限の体力の範囲内では、体力の相違は無に等しくなる。また、慣習が暴力を禁じているところでは、筋力は支配の基盤とはなりえないはずだ「[...]」(DS176/93)。
- (7) 中澤瞳はトリル・モイとアイリス・マリオン・ヤングがポスト構造主義的なジェンダー論が想定しがちなこうした二者択一に陥らないために、あえて女性たちの身体経験に立ち戻った経緯を明快に論じている(中澤 2018: 322-323)。
- (8) 例えば、生物学の内部に見られる「雌は受動的な存在である」、「種の維持は雌によって担われており、雄は瞬間的な要素としてのみ係わっている」という二つの偏見が批判的に検討されるとともに、卵子は受動的であり、精子が能動的であるという見方が当時の科学的知見によって否定されている(DS148-49/59-60)。
- (9) 先に見たようなボーヴォワールの主張は、社会構築主義的な立場からも(あるいはそうした立場からこそより徹底した形

で) 唱えられると反論する人もいるかもしれない。こうした反論は、社会構築主義をいかなる水準で理解すべきかという問い (cf. Haslinger 2012, chap. 24) とあわせて稿を改めて論じる必要がある。ここではボーヴォワールとバトラの相違が、両者における生物学の位置づけや、実践や言語から独立した実在を認めず、真理とフィクションの境界線を曖昧にするような構築主義的な見方をボーヴォワールはとっていない点に見取られること (Garcia 2018: 2021: 69-70) ——そしてそれは彼女の不徹底さとしてのみ理解されるべきではないこと——だけを指摘しておきたい。

(10) 第一巻の序文でこのことが明確に予告されている。「生理学的であれ、心理学的であれ、経済的であれ何らかの宿命が女性にのしかかっていると想定してしまうと、当然ながら、この「人間の可能性を自由の観点から定義するという」問題はいかなる意味ももたないことになってしまう。それゆえ、まずは「第一巻で」生物学、精神分析、史的唯物論が女性についていかなる観点をとっているかを議論することから始めよう」(DS I 3442)。

(11) 『第二の性』に対して向けられてきた国内外の批判については、Bauer 2001: 49; 249 note 4; 井上 2015: 191 を参照。

(12) 「ブルジョワの女性たちは、プロレタリアの女性たちとはなく、ブルジョワの男性たちと連帯しており、白人の女性たちは、黒人の女性たちとはなく、白人の男性たちと連帯している」(DS I 2123)。

(13) 一つ目の反論に関しては、『第二の性』に (a) (c) の主張を帰属できるか否かが問題となるだろう。とりわけ (b) は、第二部「歴史」の「労働者階級の場合には、経済的抑圧が男女の不等等を打ち消す (annule)」(DS I 174/220) という記述を典拠としているが、それこそ過度の一般化をしない限り、ここにボーヴォワール自身の主張を読み込むことは難しい。二つ目の反論に関しては、『第二の性』のなかで「実存主義の道徳」が一つの道徳規範には汲み尽くされない倫理学的意義を担っていることが考慮される必要がある。この点については、池田 2017: 68-69 を参照。

(14) パウアーが用いる「傲慢^{arrogance}」と「言い張り」(arrogation) の区別は、カヴェルの『哲学の声』に由来する (カヴェル 2008 第一章参照)。

(15) パウアーはデカルトの『省察』とボーヴォワールの『第二の性』の構造上の類似性とその決定的な違いを分析するなかでこのことを示している (Bauer 2001, chap. 2)。

(16) 例えば、表向きでは中絶を不道徳な行為と禁止しながら、女性に中絶を強いる男性たちの二枚舌 (DS II 338/下 26-27) や、女性たちが自分に向けるまなざしのなかに男の理想像や男らしさの期待を読み取る男性たちの自己欺瞞 (DS II 637-638/下 451-

452) などが描かれている(後者については、小手川2019で論じた)。

(17) 実際、ポヴォワール研究の国際雑誌『シモーヌ・ド・ポヴォワール研究』の二〇二一年度のテーマには「男性性」(masculinity)が選ばれ、ガルシアらが寄稿している(*Simone de Beauvoir Studies*, Vol. 32(2), 2021)。

(18) 本稿は、二〇二二年六月二五日に開催された実存思想協会第三八回大会講演会「フェミニズムと実存」の趣旨説明を端緒としている。講演会で素晴らしい提題と質疑応答を下さった藤高和輝、横田祐美子の両氏に深謝します。また本稿の内容に関しては、二〇二二年度学習院大学大学院での「哲学演習」(ポヴォワール『第二の性』を中心に)でのテキスト読解や議論が主要な着想源となった。演習に参加し、質問や意見を発してくれた受講生の方々にも併せて感謝したい。